

会名(誌名)の『生活の発見』の由来

H29.2.7 訂2

水戸集談会

生活の発見会(以下、発見会)という名称の、『生活の発見』の由来は、以下の発見誌の記事で解説されているとおり、中国人の文明批評家；林語堂氏の著書名から採られたものです。

●発見誌 平成 25 年 12 月号の溝ノ口俊市郎氏(啓心会の頃からの大先輩)の解説より

①『生活の発見』の由来；

水谷啓二氏を中心に、啓心会を誕生させた(1956(昭和 31)年 8 月^{注1)}後、1957(昭和 32)年の機関誌の創刊にあたって、永杉喜輔氏(当時、群馬大学名誉教授)が万座温泉に入浴中に思いついて提案した、以下の、ニューヨークで出版された林語堂(リン ユータン；元北京大学教授。世界的な文明批評家)氏の著書の邦訳版の書名、これを使わせてもらったもの。

「林語堂著『The Importance of Living』(1937)の邦訳版『生活の発見』(坂本勝訳、1938)^{注2)}」

②啓心会は発見会の一部会として、2 か月に 1 度集っていた。

^{注1)}「あるがままに導かれて—森田療法の伝道者 水谷啓二と共に」(2010 年 9 月 12 日刊)

^{注2)}その後、題名のみ変更し、「人生をいかに生きるか 上・下」(講談社学術文庫)として、1979 年 11 月に出版され、現在も Amazon 等で入手可。

●発見誌 平成 25 年 1 月号 P.48～の山中和己相談役の解説より

①生活の発見会の発足；1957(昭和 32)年 10 月の「生活の発見」誌の創刊号の発刊をもって発足。

⇒水谷啓二先生の主催する「啓心会」と下村湖人先生につながる人たちの「新風土会」の両会の中から有志の方々が協力し、同人組織として、結成された。

1970(昭和 45)年 3 月の水谷先生の急逝後、長谷川洋三先生を中心に理事会組織による運営へ組み換えや会則の制定が行われた。その後、理事会の決定で、1972(昭和 47)年 6 月から、「地区啓心会」を「生活の発見会・地区集談会」へと、名称変更^{注3)}が行われた。

②発起人のお一人の永杉喜輔 群大名誉教授の述懐

「こんど 森田正馬博士の精神を継ぐ水谷氏を中心とした啓心会と、湖人先生を記念する新風土会の同人が協力して、この雑誌を出すことになった。・・・『生活の発見』というのは、林語堂の書名から採った。われわれの願いが、そのものズバリ言い表されているように感じたからである。」

^{注3)}「生活の発見会略年譜」(発見誌 平成 12 年 6 月号、P.95)より

次頁にも関連情報があります！！

関連情報

1. 「水谷啓二追想録編集委員会」編集・発行の、『あるがままに導かれて ー森田療法の伝道者 水谷啓二と共に』(2010年9月12日)によれば、水谷先生が「生活の発見」という名称に込めた思いは、「森田正馬が示している正しい生活態度を身につかみさえすれば自然に治っていくことを、時代を超えて人々の毎日の生活の上に具現し、社会に広めてゆきたい」ということでした。
2. 東京慈恵会医科大学名誉教授の新福尚武先生の、水谷先生の「生活の発見」に関する意味深い体験を紹介した「個性的な生き方」(P.20～)の記事

森田に帰依したのちの最大の出来事は生活の発見だったのではなかろうか。それはノイローゼ的悩みの方向に進むのも、向上発展の方向に進むのも実は紙一重の差で、その差のもとにあるのは生活が本物になっているかどうか、本物の生活を見つけているかどうかにあることがわかってきたからであった。医師でなかったため、いろいろの中傷、非難など浴びたが、それらにはひたすら耐え忍ぶこと、妥協などは考えず本物の自分になりきることを心掛ければそれだけで十分と考えた。こうして一切の雑音に耳をかさず、どんな境遇になっても素直に受け入れ、気になることは気になるままに、不安恐怖があれば不安恐怖のあるがままに対処していくという生き方こそ真の自分の生き方だということの意味が心底から会得された。そしてそれは心構えなどの問題ではなく、それを超えた実生活の仕方の問題で、それには新しい生活が発見されなければならないこと、発見がない限り真の安心は得られないということが身に沁みてわかってきたからである。

外相整って内相おのずから熟すという言葉の通り、「新しい生活の発見」によって生活の内相がおのずから熟するという、まことに意味深い貴重な体験をすることができたのであった。

